

延享年中たぼさしの圖

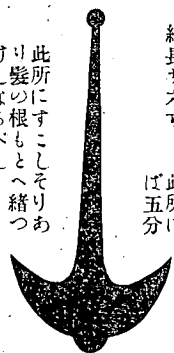
總長サ六寸

此所は
五分

横の張り四寸

工細鯨

此所にすこしそりあ
り髪の毛もとへ緒つ
けしなるべし



中は高く
左右の張
り上へ反

按に、元文延享の頃、かもめたぼとて、えりのあたりまではり出す結やう流行たる事物に見えたり、此たぼさし長サ六寸あるを以て、其たぼの長かりしを知るべし、

〔諺話浮世風呂三編上〕朝湯より晝前のありさま

辰いへさ何も移りかはる物でございますよ、鬢挿を入はじめた事は、近頃のやうに存ました、その前は一面に、^{つまなほ}アイサ、みんな摘鬢でございました、それがおまへさん、鬢挿だの張籠だのと、調法なことになりました、獨手に髪が結はれます、

〔嬉遊笑覽容儀下〕鬢さしは、安永八年はやり出て、此頃すたれ、^{中略}寛政中より曲の中に入る紙のばれも曲の大きなるが、はやりて、はりこも大に造りたりしが、^同はりこは、島田丸曲、島田くづし、筆あり、そのつと意巧を加へて、のぎ筋を毛筋の如く付て作る、たぼさしも色々かはり、上り、今用る所なり、

〔歴世女装考四〕びんさし

鬢刺

今を去ること六十餘年前、天明より寛政にわたり、婦人の髪にびんさしとて、鯨又はべつかふなどにて、鍋のつるのやうなる物を作り、是に髻の毛をかきなで、びんを張り出して結ふ風はやりし事、今六十以上の人の知る所なり、大坂の俳諧師、匠伊原西鶴が、貞享の比の遺稿を、元禄八年に板行したる俗つれ、^{卷四}に、振袖の女をゑがき、髪の風著服足袋はき物にいたるまで一々に系を引て細に傍註したる中に、前髪の所に系を引て、ふきまへ髪くぢらのひれのまがりたる物を入て、髪のうごかぬやうにとあり、野群談享保二年、大坂卷二、當世の女しゆは、^略中水牛の髻あげ、針録入りのはね元結とあり、享保のころも、つとあげといふ物ありしとみへたり、是びんさしの